便利すぎるほど便利！

岳本恭治 著

ピアノを読む

楽器をめぐる歴史と作品、そして演奏家

荒木淑子

ピアノを読む
楽器をめぐる歴史と作品、そして演奏家
岳本恭治—著
音楽之友社

ずっしりと重量感のあるこの本はB5判232ページ。「重い…」というのがこの本を初めて手に取ったときの感想だが、パラパラとめくると図や写真も多く、字がびっしりで読みにくいということもなさそうだ。

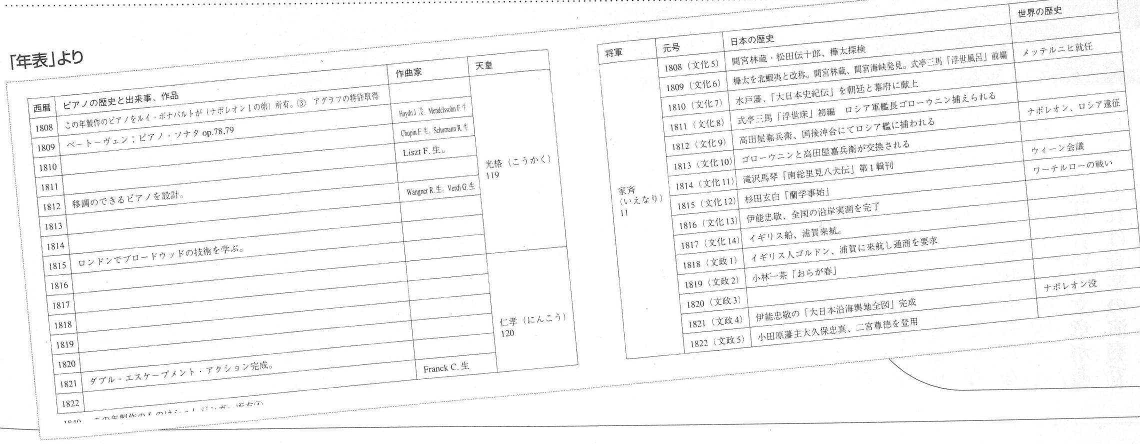
その中で真っ先に目につくのが、細かい表組（ここだけ紙質がクリーム色になっている）。これが本書の大きな特色のひとつ「読む」年表で、全体の3分の1ほどのページ数になる。

見開き2ページでひとつの表になっているこの年表は、縦は1年毎に区切られているのだが、面白いのは横に並ぶ項目。ピアノに関する出来事と同時にその年の日本の出来事も詳しく載っているのだ。そしてその詳しさは中途半端ではない。たとえばII章のピアノ制作者年表では「西暦・ピアノの歴史と出来事・作曲家」に続いて「天皇・将軍・元号・日本の歴史・世界の歴史」の項目が横に一直線につながっている。

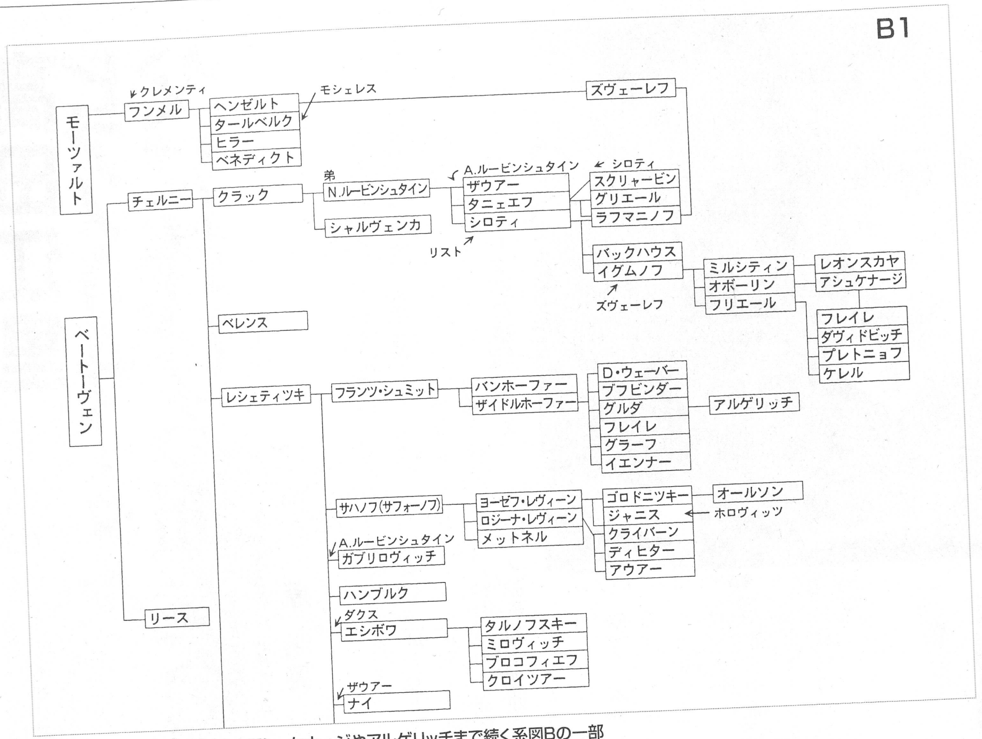
ピアノを読む
楽器をめぐる歴史と作品、そして演奏家
岳本恭治 著
定価：3400円＋税（送料別途）
制作：音楽之友社

注文先：日本J. N. フンメル協会
〒154-0021東京都世田谷区豪徳寺1-4-6
☎／FAX 03・3425・5571
E-mail:ken-1778@mtb.biglobe.ne.jp

「年表」より



西暦	ピアノの歴史と出来事、作品	作曲家	天皇	将軍	元号	日本の歴史	世界の歴史
1808	この年製作のピアノをルイ・ボナパルトが（ナポレオン1の弟）所有。③　アグラフの特許取得		光格（こうかく） 119	家斉（いえなり） 11	1808（文化5）	間宮林蔵・松田伝十郎、樺太探検	
1809	ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ op.78,79	Haydn J.没、Mendelssohn F.生			1809（文化6）	樺太を北蝦夷と改称。間宮林蔵、間宮海峡発見。式亭三馬「浮世風呂」前編	メッテルニヒ就任
1810		Chopin F.生、Schumann R.生			1810（文化7）	水戸藩、「大日本史紀伝」を朝廷と幕府に献上	
1811		Liszt F.生。			1811（文化8）	式亭三馬「浮世床」初編　ロシア軍艦長ゴローウニン捕えられる	
1812	移調のできるピアノを設計。				1812（文化9）	高田屋嘉兵衛、国後沖合にてロシア艦に捕われる	ナポレオン、ロシア遠征
1813		Wangner R.生、Verdi G.生			1813（文化10）	ゴローウニンと高田屋嘉兵衛が交換される	
1814					1814（文化11）	滝沢馬琴「南総里見八犬伝」第1輯刊	ウィーン会議
1815	ロンドンでブロードウッドの技術を学ぶ。				1815（文化12）	杉田玄白「蘭学事始」	ワーテルローの戦い
1816					1816（文化13）	伊能忠敬、全国の沿岸実測を完了	
1817			仁孝（にんこう） 120		1817（文化14）	イギリス船、浦賀来航。	
1818					1818（文政1）	イギリス人ゴルドン、浦賀に来航し通商を要求	
1819					1819（文政2）	小林一茶「おらが春」	
1820					1820（文政3）		
1821	ダブル・エスケープメント・アクション完成。				1821（文政4）	伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」完成	ナポレオン没
1822		Franck C.生			1822（文政5）	小田原藩主大久保忠真、二宮尊徳を登用	

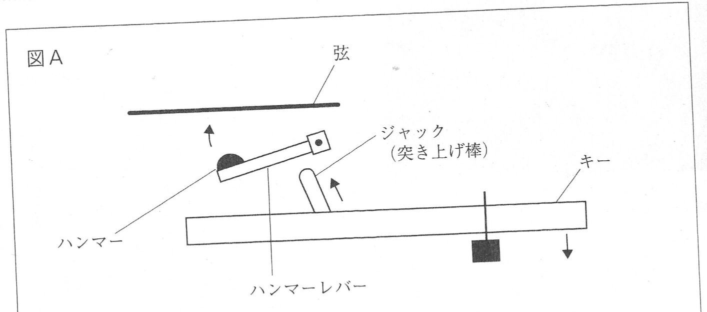

B1
モーツァルト
クレメンティ
フンメル
ヘンゼルト
タールベルク
ヒラー
ベネディクト
モシェレス
ズヴェーレフ
ベートーヴェン
チェルニー
クラック
弟
N.ルービンシュタイン
シャルヴェンカ
A.ルービンシュタイン
ザウアー
タニェエフ
シロティ
リスト
シロティ
スクリャービン
グリエール
ラフマニノフ
バックハウス
イグムノフ
ズヴェーレフ
ミルシティン
オボーリン
フリエール
レオンスカヤ
アシュケナージ
フレイレ
ダヴィドビッチ
プレトニョフ
ケレル
ベレンス
レシェティツキ
フランツ・シュミット
バンホーファー
ザイドルホーファー
D・ウェーバー
ブフビンダー
グルダ
フレイレ
グラーフ
イエンナー
アルゲリッチ
サハノフ(サフォーノフ)
ヨーゼフ・レヴィーン
ロジーナ・レヴィーン
メットネル
ゴロドニツキー
ジャニス
クライバーン
ディヒター
アウアー
オールソン
ホロヴィッツ
A.ルービンシュタイン
ガブリロヴィッチ
ハンブルク
ダクス
エシポワ
タルノフスキー
ミロヴィッチ
プロコフィエフ
クロイツアー
ザウアー
ナイ
リース

V章「ピアニストの系譜」より。アシュケナージやアルゲリッチまで続く系図Bの一部

著者のこだわりも相当なものと感心しつつ、つい日本の歴史ばかり見て、著者の「読む」年表にはまってしまう。ちなみに1709年のピアノの誕生の年は、日本では「中御門（なかみかど）天皇・将軍家宣（6代）・宝永6年・東大寺大仏殿再建。生類憐みの令廃止」の年である。

次のIII章ピアノと作品関連年表では、横の項目に「年齢」や「ピアノの種類」、「作品」も加わり、さらに至れり尽くせりの年表。これは便利すぎるほど便利でトラの巻として使ってしまいそうだ。

またもうひとつの特色であり、読みごたえのある箇所は、後半のV章ピアニストの系譜。ピアニスト・クレメンテイから現在までの師弟関係が、影響を受けたピアニストをも含めて網羅されている。歴史上の名ピアニストたちからキーシンまでのひとりひとりの短い解説はそのままミニ人物辞典になっているし、クレメンテイ系の門下たちの系図Aと、モーツァルト系列とベートーヴェン系列からなる系図Bは、アルゲリッチやブーニンまで続く。レコードでしか知らなかったような往年の名ピアニストたちの名前がなつかしい。


図A
弦
ジャック
（突き上げ棒）
キー
ハンマー
ハンマーレバー

イギリス式アクションの略図
キーを押し下げるとジャックが上がり、ハンマーレバーを押し上げてハンマーに作用し打弦する。

I章「ピアノの構造とその歴史」より

このほか、本書にはピアノの楽器としての歴史やピアノにまつわるエピソード、名曲再発見など盛りだくさんの内容がつまっている。特にピアノの発音に関わる、イギリス式アクションとウィーン式アクションについては、それぞれの発達課程が図解入りで詳しく説明されている。その課程での楽器と作曲家の深いつながり、作品になって現れる名曲の数々が前述の「年表」にも結びつく。

著者の旺盛な知識欲や幅広い好みまでもが垣間みられる本書だが、著者は現在、日本J・N・フンメル協会の会長であり、ピアニスト、音楽ジャーナリストである岳本恭治氏。中学時代に楽器や作曲者や曲の時代背景などに興味を持つようになって調べ始めたという。これまでに集め続けた資料の集大成が本書なのだろう。重さを実感する労作である。が、案外ご本人は楽しんで、ひとりでこつこつとコンピュータに向かっていたかもしれない（たぶん）とも思う。

本書は単なる資料集ではない。「ピアノはデリケートな楽器であり、決してスポーティーに演奏してはいけない」という著者の願いが込められた『警告本』なのである。本書の所々に現れる著者のコメントからも岳本氏のピアノに対する深い想いがこぼれ落ちている。